

2021. 5. 30. 主日礼拝説教
聖書：ヨハネによる福音書6章22-33節
『イエスは命のパン』

ともすればわたしたちは全ての障壁を越えて事柄を断行するようなパーソナリティーの到来を期待してはいないでしょうか。惑うことなき強力なリーダーシップによる揺るぎない未来への指針。自分の持つ悩みや迷いを遮断し、解決への糸口を指し示してくれる明晰な導き手・・・等々。古来より人はそのような者への憧憬を抱き続けている一面がおそらく誰にでもあることと思います。しかしながら、そんなものは夢や幻どころか単なる滑稽で下卑な妄想の類ではないのです。

福音書が証言するキリスト像は決してそのような「断行するヒーロー像」ではありません。例えば、奇跡物語においてさえ摩訶不思議な出来事に終始するのではなく、そこには徹底して現実を生きる哀しみや喜びが語り綴られて行きます。それは酷く厳しい愚かな人の世の有り様と同時に、暖かく愛と希望に満ちあふれた人の世の交わりの豊かさが重なり合い紡ぎ出されて行きます。その過程で「あなたはだれと生きようとしているのか」という問いが繰り返し発せられて行くのを読み取るのです。いわば人の視点を越えたもの、神の視点としての迫りなのです。そこではいつも「断行し陶酔させるイエス」に終わるのではなく、「寄り添われるイエス」の姿があらわにされて行くのです。

ヨハネ福音書の書記者は「給食」と「湖の上を歩く」奇跡の記事の後日譚を描きます。22節から「群衆」が主語として登場します。聖書には似た言葉に「民衆」があります。これはルカによる福音書の書記者が「群衆」と対比して「イエスを積極的に受け入れる人々」という意味で用いました。それ

では「群衆」はどういう意味づけだったのかというと「驚き・おそれる人々」という意味なのです。それは多分に表面上のイエスの行いや言葉に反射的な反応しか出来ない人々を指したことでしょう。いわば奇跡物語のおこぼれに預かるように彼らは登場します。ただ彼らの「食べ物」への執着を笑い飛ばすわけにもまいりません。この時代はローマ帝国の圧政のもとユダヤ自体が貧困を強いられていたし、石をパンに変える(マタイ4;1-11・ルカ4;13)記事からしても深

刻な問題だったことが分かります。特に初代教会が共に生きようとした障がい・病い・高齢・女性・子ども・職業・異邦人等ゆえに差別を受けていた人々にとっては貧しさは最優先の課題でした。腹を空かせたわが子に食べさせるパンのひとかけさえない。悲しいことです…。現代では思い巡らすこと自体難しいかとおもいますが、食べ物のパンと命のパン、肉の糧と霊の糧は質こそ違えど同格の事として語られたのです。

群衆は31節以下でモーセの故事を引用し、イエスに「しるし」、つまり奇跡の断行を要求します。イエスはファリサイ派や律法学者に対する時のように、はぐらかすことなく、つまり群衆の側に寄り添いつつ応えます。「神がお遣わしになった者を信じること、それが神の業である」と。ここでヨハネはキリスト論を再び記すのです。

おそらくこれらの論議は初代教会・共同体で繰り返し議論の対象になった事柄だったのでしょう。人は虐げの中でどう生きるのかという課題なのです。そこで、人は食べるパンを渴望するだけの他者依存に偏った自己中心的な存在ではなく、他者と共に生きる責任と連帯ある自立した信仰、つまり「イエスは命のパンである」ことを選びとっていったのではないのでしょうか。